
大晦日の出会い

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大晦日の出会い

【Nコード】

N0122BA

【作者名】

モンスター

【あらすじ】

これは、大晦日に起きた奇跡の話……

今日は12月31日大晦日……明日からは新年が待っている。
だが俺にとって新年は来て欲しくない……来年は高校を卒業するか
らだ。

高校を卒業するのさえ難しい俺は、今日も物思いにふけている。
ちなみに俺は自分では認めないが世間は俺の事を不良と見る。
だから卒業してもろくな就職も出来ないのだ……

（考えても仕方がない……外に出るか）

外に出ると辺りは夕闇に包まれており、ぽつり、ぽつりと雪が降っ
てきている。

（ああゝ寒……）

ダウンを着ているが手はとても寒かった。
手袋を着けろって？ カッコ悪いから無理だな。
腕時計を見ると新年まであと7時間あった。
それにしても、道には人がそんなに居ない。

（まあ、大晦日だからな。今頃家でそばでも食ってんだろ）

ただ歩き続け、公園に着いた。
公園のベンチに座り、タバコを吸う。

（……良く考えたらこれがヤンキーと見られる原因なんだよな……）
すぐに吸うのを止め、タバコを踏み潰した。

（さて……家に帰っても面白くねーし、友達が多分家でゆっくりしてるし……）

とりあえずベンチで寝っ転がって空を見上げた。

雪は止んできて、夜空が見える。

（そういえばこんな感じで夜空を見上げたのは初めてだな……来年からは、馬鹿やつたり出来ないんだな……）

起き上がり、家へ帰り始める。

その途中の人目につかない駐車場で違う高校の女子が数人の男にナンパされている。

（そういえば以前どこかで……それにしても無理矢理というのは関心しねーな）

彼女が誰か思い出せないまま俺は止めに入った。

「やめろ……彼女が嫌がつてるじゃねーか」

数人の男の内、一人が俺に近づいてきた。スキンヘッドの大男だ。

「俺たちに何か用か？ ……そういえばお前見たことあんな……」

大男が少し考えて言った。

「そうか！ お前以前俺の舎弟をボコボコにしたろ……今から復讐してやる」

「はあ！？ お前の部下なんて覚えてねーんだよハゲー！」

大男の顔面に拳を入れた。

他の奴らも倒そうとすると、彼女を人質にしてきた。

「残念だな。まあお前が俺たちに危害を加えなきゃ良い話なんだよ」

今すぐボコボコにしてやりたかった。

だがそんな事をすれば彼女にも危害が加わるだろう。

一瞬彼女の顔が見えた……目に涙を浮かべている……

(クソが……)

……抵抗を止めた……

「おお、まさかとは思ってたが……やっちまえ！！」

奴らのリーダー格が言った。

一人の男に腹を殴られうずくまり、その後は蹴りの嵐……意識は途切れそうになった。

(まあ助けられたし、良しとするか……今度ぶっ飛ばすから待ってろよ……)

完全に意識は途切れた……

「大丈夫ですか？」

不意にどこからか声が聞こえた。

目を開けると彼女が泣きながら俺の横に座っている。
立ち上がるうとする体中が悲鳴を上げる……

彼女は俺の手を握りながら言った。

「そのまま居て下さい」

言われた通りそうしてるとだんだん痛みが楽になってきた。
その間俺の横にはずっと彼女が居た。

「どうしてだ……」

「え？」

彼女はキョトンとした顔で答えた。

「なぜ俺を見捨てずにずっとここに居るんだ？」

上半身だけを起き上がらせ言った。

「なぜってそれは……あなたに助けてもらうのがこれで二回目だから……」

その瞬間思い出した。彼女が誰なのかを……

そう……あれは3週間前の事だった……

公園で彼女が何人かの男たちに囲まれていたのを発見した俺は、
またまその男に以前仲間をやられた事
からボコボコにするついでで助けたのだ。

「ああ、あの時のか」

「思い出してくれましたか？　ずっとお礼が言いたかったんです。二回も助けていただいてありがとうございます」

ペコつとおじぎをしながら彼女が言った。

「それは、別に良いんだが……」

夜空を見上げながら言った。

彼女も俺に習い、夜空を見上げた。

「きれいですね……」

「全くだ……」

二人でずっと空を見上げていた……
その時彼女がぽつりと言った。

「来年なんか来なかったら良いのに……」

（俺と一緒にの考えじゃねーか）

「どうしてだ？」

俺は聞いた。その後聞かなければ良かったと後悔した。

「実は私……寿命が残り少ないの……」

彼女は涙を浮かべながら言う。

「ねえ、どうして死なないといけないの……私だってまだまだ生きたいのに……医者には望みがあるって言われたけどそれも20%……」

彼女は完全に泣いている……

俺はこう言った。

「人間はいつかは死ぬ……だが諦めるな！ まだ望みはあるんだろ……」

「ええ……けど無理よ」

俺は本気で彼女に死んで欲しく無いと思った。

「頼む……生きてくれ……」

どうやら俺が泣いているらしい……視界がぼやけてきた。

「不思議……まだ二回しか会ったことが無いのに……」

「それはな……お前の事が……」

最後の方に行くにつれ声が小さくなっていく。

「……好きだからだよ」

彼女は目を赤くしながら俺の話を聞いている。

「まだ二回しか会ったことが無いが……俺もさっきまで実は来年な

んて来なければ良いのにと思っていた
……だが、今はそうは思わない。頼む、生きてくれ……」

長い沈黙の後に彼女はこう言った。

「分かった……絶対に死なないからね」

その後、彼女にケータイ貸してと言われ貸した。

「これでメアドは交換したからね」

「俺たち……また会えるかな……」

俺は言った。

「ええ、きっとね……」

彼女は去り際にこう言った。

「そう言えば、まだ名前を言ってなかったよね？ 私は雨宮春奈。
貴方は？」

「俺は、来宮優斗だ」

その後二人がどうなったかは語らないでおこう……
しかし彼女は生きることが出来たということだけは覚えておいて欲しい……

（後書き）

この後、どうなったかはご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122ba/>

大晦日の出会い

2011年12月31日08時49分発行